

Y G 需要減少や輸出低迷から需給緩和 廃食用油価格は高止まりもコスト増で採算低下

輸出の激減に加えて、飼料用油脂の需要が鈍っており、廃食用油の需給のひっ迫感は薄らいでいる。

■発生量は低水準続く

廃食用油(回収油、2号油、UCオイル)は、ここにきて需給のタイト感が解消されている。

発生量自体は、低調な状況が続いているものの、輸出量が前年比6割と大幅に減少し、飼料向けも猛暑などの影響で夏場から需要が弱まっている。需給緩和から廃食用油の価格も足踏み感がある。

まず、供給面をみると、廃食用油の発生量は低水準で推移している。排出先である外食産業は、前年と比較して回復傾向にあり、日本フードサービス協会の調査によると、外食産業の売上は、2月と7月を除いて前年を上回って推移している。業態別には、特にファミレスとディナーレストランが好調である。

また、中食関係の需要については、食品スーパー3団体の統計をみると、惣菜の売上(全店ベース)は1~8月までいずれも前年を上回っており、堅調な需要が伺える。

しかしながら、個店ベースでは、廃油の発生量が増加しているというより、むしろ減少しているとの見方が多い。というのは、今に始まったことではないが、大手チェーン店などを中心に新油の価格が値上がりする中で、なるべく廃油を出さず使い切る動きが強まっている。差し油をしたり、ろ過機を導入したりすることで、廃油の発生量を減らし、コストを削減する取り組みが行われており、そうした影響が出ているとみられる。首都圏の大手回収事業者からは「特にスーパーは価格競争が激しいため、顕著に減っている」という声も聞かれる。

例外的に発生量が伸びているのがCVS関係で

ある。CVSは、店舗数が前年比約5%増加していることに加え、フライ商品の消費者の認知が上がってきており、若干発生量が増えているようだ。

■飼料用需要に停滞感

廃食用油の需要については、飼料用油脂(YG)や輸出が好調だった2012年のような勢いはなく、前年を下回っているとみられる。

廃食用油は、年間28~31万トンの推定発生量(廃棄分除く)のうち、需要の約7~8割(23~25万トン)は、YGの原料として使用されており、YGの需給動向に大きな影響を受ける。

YGの需要は、4~7月まで前年比101.5%と堅調に推移している。YGの配合飼料の配合率は、トウモロコシ、大豆ミール、DDGS(油分が低下している)などとの価格の兼ね合いで決まるが、今年度の配合率は平均1.81%と高い水準で推移している。

価格が急騰したトウモロコシや大豆ミールの配合が抑えられる一方で、小麦やDDGS、糟糠類の配合を増やしており、油分(カロリー)を補うためにYGの添加量が高止まりしている。

ところが、8月以降は需要に停滞感が出てきているという。昨年9月頃には、在庫がほとんどなかったが、「今年は東北や九州に在庫がある。油がないという状況ではない」(商社)という声も聞こえており、需要の鈍さがうかがえる。

YGの主用途(YG全体の4~5割)であるブロイラー向けの需要が落ちており、恐らくブロイラーの入雛羽数が減少に転じていると推測される。今年4~7月のブロイラー用ひなえ付け羽数(農水省調べ)は前年比104%と推移しているが、

表-1 飼料用油脂と配合飼料の推移
(単位:原料合計と飼料用油脂:トン、配合率:%)

	原料合計	飼料用油脂	配合率
2007年度	24,518,514	422,681	1.72
2008年度	24,547,382	417,935	1.70
2009年度	24,853,438	421,763	1.70
2010年度	24,537,681	425,213	1.73
2011年度	24,314,603	441,518	1.82
2012年度	7,897,497	142,641	1.81

(資料:農水省生産局畜産部)
※2012年は4~7月。

8月以降は前年を下回る見込みである。

鶏肉の需要自体は、4~7月まで前年比108.7%と好調に推移してきたが、大量に入ってきた輸入鶏肉の在庫が7月時点で前年比112.2%の12万2,543トンと過剰感が解消されていない。市況が悪化する中で、生産調整の動きが出ているようだ。

ブロイラーに次いで、需要が大きいレイヤー向けについても、製品である鶏卵の需要低迷の影響が懸念される。今年度(4~9月)の鶏卵価格は前年比85%と低迷しており、採卵用雌ひなのえ付け羽数は、4~7月で同97.6%と前年割れしている。

また、夏場の猛暑の影響でブロイラーやレイヤー、豚の餌の摂取が悪くなっていることもYGの需要に影響を与えているようだ。

その他では、食用との価格差が7円と縮小したことで、九州や東北では食用グレードの飼料落ちがあったことで、供給面の不足感が緩和されている。最近の動きとしては、チキンミールが動き始めており、YGの配合量に影響を与えそうだ。

そうした状況の中で注目された10~12月のYGの価格交渉は、結局据え置きで決着した。全農向けのYGHが81円/kg、YGLが76円とみられる。なお、廃食用油の飼料用向けは、7~9月については、60円台前半で取引されており、恐らく10月も横ばいでスライドするとみられる。

現在は、YGの需給に少し余裕があるものの、年末にかけて需要が伸び、タイト感が高まってくると予想される。年間を通してみると、需要が堅調に推移すると、YGの供給は3万トン程度不足するという見方もされている。

■韓国向けの輸出が激減

輸出用途は、廃食用油の需給調整弁のような役割を担っている。2011年の廃食用油の輸出量(推

表-2 廃食用油とみられるその他動物油の輸出
(単位:トン)

	韓国	台湾	マレーシア	合計
2008年	934	755	1,143	2,832
2009年	30,474	1,043	265	31,782
2010年	30,376	1,296	1,098	32,770
2011年	24,846	3,972	1,195	30,013
2012年	11,925	1,798	626	14,349
前年比	65.5	55.9	81.7	64.7

(資料:財務省「貿易統計」)

※単価から廃食用油とみられる国のみ掲載。2012年は1~8月。

定)は、前年比91.6%の3万13トンで、09年以降は3年連続で3万トン台が続いている。

今年の輸出量(同)は1~8月で前年比64.7%の1万4,349トンと大幅に減少している。これは、ある大手商社が昨年6月からYGの供給を優先するため輸出を取りやめていたことのほか、飼料用の価格が高く、円高が続く中で買い負けて玉が集められていないことが影響している。

現在は、LOPS、佐嘉商事(小桜商会)、ケイラボの3社が主に輸出を行っている。

輸出先は、韓国が全体の約8割と圧倒的に多く、量は少ないが台湾やマレーシア向けもある。韓国では、BDFの原料として、価格が安く品質が良いことから日本の廃食用油の評価が高い。わが国の韓国向けの輸出は、価格が合えばまだ増える余地が十分にある。

中国からも廃食用油が韓国に輸出されているという噂もあるが、中国の廃食用油価格は高く、韓国に入っているとしても量は少ないと推測される。

韓国では、BDFの消費量は年間約40万トンに達し、ディーゼル自動車へのBDF配合量は2%と設定されている。

韓国向けの廃食用油の輸出価格(FOB)は、財務省の「貿易統計」によると、8月で72.9円/kgだった。輸出価格は、夏場はパーム油にそれ以外の季節は大豆油に連動する。大豆油の国際価格の急落の影響が近々出てくると予想される。

輸出向けに数量が集められない状況について、ある商社の担当者は「最低限の輸出だけはしないと、いざという時に困ると廃食用油業者に話している。ただ、飼料用の需要が一定量ある中で溢れる時があるのか分からない」と話し、輸出の先行きに不透明感を持っているとの認識を示した。最近、別の商社が廃食用油の在庫に余裕があることから輸出再開を検討しているが、輸出したとし